

エベレスト・トレイルのトレッカーの特徴と現状

Understanding the Travels of Trekkers on the Everest Trail in Nepal

韓 志 昊*

HAN, Jiho

Abstract: This paper presents the findings of field research conducted in March 2017 in Sagarmatha National Park, Nepal to explore the characteristics of trekkers on the Everest Trail. The need to hire porters and guides for trekking is the significant feature of the Everest trail trekking. The current situation of porters and guides in trekking tourism of Nepal needs further research.

Key words:トレッキング (trekking), エベレスト・トレイル (Everest Trail), トレッカー (trekker)

- I はじめに
- II 調査概要
- III 調査結果
- IV 今後の研究課題

I はじめに

2016年度にネパールを訪れた外国人観光客753,002人の中で, “Trekking & mountaineering”を目的に訪問した割合は9%であり, 65%の“Holiday Pleasure”, 11%の“Pilgrimage”に続いて3番目に多い順である。しかし, 1993年からの推移を見ると, 増加が著しい外国人観光客総数の推移と異なり, 大きな増加は見られない(図1)。世界最高峰(8,848m)であるエベレスト(ネパール語はサガルマータ, Sagarmāthā)は, ネパールにおいて, 何よりも観光資源として重要な役割を占めている。しかし, 2002年以降に2012年まで外国人観光客数は大きく増えているが, トレッキング客数は, 2002年の59,279人から2009年の132,929人まで2倍に増えてから, 2010年にまた7万人台に減少し, 2015年の地震前

の2014年までにも97,185人と3割弱の増加に留まった。2015年にネパールに大きな被害をもたらした地震の影響で外国人観光客数とトレッキング客数とも大幅に減少したが, 2016年には外国人観光客数が2014年度の79万人に近い75.3万人に回復した(図1)。

ネパール・ヒマラヤ地域に関する研究は, 観光に関わるものでも, 観光客増加による環境への影響に注目した研究が主である。ネパール・ヒマラヤのトレッキング観光に関連する研究のレビューは, 渡辺(2012)を参照していただきたい。

トレッキング客への聞き取り調査は, 時間と費用だけでなく, 高山病や寒さなどの困難が伴うため, 実際にトレッキングをしながら行ったものがほとんど見られない。特にここ10年間日本で発表された研究(カルカ・クリシュナ・バハドゥル, 2013a, 2013b, 2012; 森本, 2012, 2009; 工藤, 2015)の中に, 現地調査によるトレッキング客に関する研究は発見できなかった。

本稿は, 2017年3月にネパールのエベレスト・トレイルに位置する6つの村にあるトレッカー用ロッジで行った聞き取り調査の報告とともに, 今

* 立教大学観光学部・教授

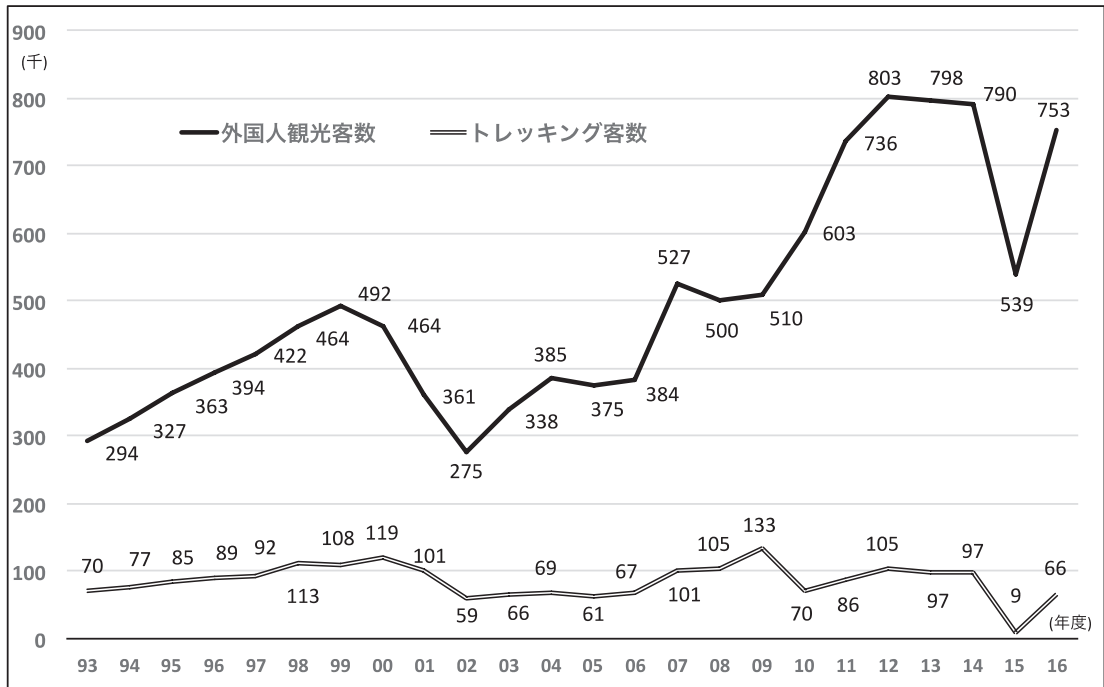


図1 ネパールの外国人観光客数とトレッキング客数の推移（1993年～2016年）
（出典：Ministry of Culture, Tourism & Civil Aviation, 2017）

後の研究課題を考察する。

Ⅱ 調査概要

エベレスト・ベースキャンプを目指すエベレストトレイルのコースにあり、トレッカーが多く滞在する6つ村のロッジで泊まりながら聞き取りを行った（表1）。午後から夕食後までの時間に食堂にいるトレッカーに声をかけ、学生2人がペアになって口頭で質問し、回答を記録した。質問項目は、国籍と居住地や年齢、性別の回答者プロフィール情報、ネパール訪問歴、トレッキングにきた理由、旅行代理店の利用有無、トレッキング日数、職業、滞在先、旅行歴、トレッキング歴である。トレッキングは、午前中のみ移動するパターンが多く、ロッジに滞在する時間が長いので、声をかけた全てのトレッカーが快く聞き取りに協力してくれた。回答の謝礼に日本から用意したボールペンや立教大学ロゴ入りの手ぬぐいを渡した。

表1 調査日程

日程	村（高度）	ロッジ
3月13日	Lukla (2,860m)	North Face Lodge
3月14日	Phakding (2,610m)	Kalapathar Lodge
3月15日	Namche Bazaar (3,440m)	Camp De Base
3月16日		
3月17日	Khumjung (3,790m)	Amadablam View Lodge & Restaurant
3月18日	Tengboche (3,867m)	Trekkers Lodge
3月19日	Jorsale (2,740m)	Jorsale Friendship Lodge
3月20日	Lukla (2,860m)	North Face Lodge

注：3月17日と18日調査メンバー中2名はNamche Bazarに留まった。

合計16人（女性6人、男性10人）の外国人トレッカーから回答を得た。年齢別に見ると、20代の5人、30代の5人、50代の2人、60代の3人、70代の1人であった。国籍は、マレーシア国籍でオーストラリアに居住している男性1人を除いて、

15人全員が欧米国籍を有している。国籍と居住国が異なる回答者が4人いた(表2)。

表2 回答者プロフィール

#	性別	年齢	国籍	居住地
1	女性	20	U.S.	Singapore
2	女性	23	Italy	
3	女性	28	Germany	
4	女性	30	Brazil	
5	女性	31	U.S.	
6	女性	52	U.K.	
7	男性	29	U.K.	
8	男性	29	New Zealand	
9	男性	32	Germany	
10	男性	33	Slovakia	U.A.E.
11	男性	34	Malaysia	Australia
12	男性	59	U.K.	
13	男性	66	U.S.	
14	男性	66	U.S.	
15	男性	68	Czech	Australia
16	男性	73	Germany	

Ⅲ 調査結果

1) エベレスト街道にトレッキングに来た理由

今回の回答者の中では、エベレスト・トレッキングに来た理由として、エベレストの景色に憧れて一度見たかったと答えた人が16人中12人と最も多い。また、山やトレッキングが好きと答えた人が2人いた。他には自分自身の限界に挑戦したかったという回答もあった。エベレストの景色が強いモチベーションとして影響することを確認できる。

2) 宿泊先

今回の調査では、インタビューを行った場所が宿泊施設のロッジであったため、回答者全員がトレッキング全日程でロッジを利用していた。ロッジは、トイレが付いてない2人部屋に泊まると、1泊で1人の宿泊料金が3ドルで、トイレ付きの部屋に1人で泊まる場合は、20～25ドルである。ロッジは、トレッカーに、安価の宿泊費で泊まってもらい、別料金で夕食と朝食を提供して利益を

あげているため、宿泊するロッジで食事を取らない客は、あまり歓迎されない。

また、ロッジを利用する場合、ポーターやガイドは、一緒に来た客の食事の注文を取ったり、料理を運んだりしてロッジの仕事を手伝う代わりに暖かい飲み物を無料で提供される。ロッジで提供するサービスが掃除と食事などに限られているため、従業員の数は2～3人ほどである。例えば、Namche Bazaar で泊まったロッジ Camp de Base は、忙しい夕食の時間以外は、男性従業員2人が朝食や食堂と部屋の掃除を担当していた。この2人はとても勤勉で清潔にロッジの環境を管理していて、オーナーはカトマンズに在住しながらたまに寄る程度でも、ロッジはトラブルなく運営できていた。このロッジの経営や実態についてもあまり研究がなされていないため、今後の研究が必要である。

3) ポーターやガイドの手配

今回の回答者の中に、1組の夫婦と友人同士の2人がカトマンズで1人のガイドを雇って一緒に移動している4人グループがいた。この4人は、カトマンズでトレッキングを終えたトレッカーからガイドを紹介してもらい、Facebook で連絡をしてガイドを雇っている。1日20ドルで雇い、1人が支払うガイド代は、1日に5ドルで、17日間予定の夫婦の場合は、2人で170ドルを払うことになる。他には、1人がトレッキング会社からガイドを雇ったと回答した。

4) 旅行期間

①トレッキング日数

トレッキング日数は、12日間から3週間と差があるが、エベレスト・ベースキャンプまで行くためには、カトマンズ発着で最低10日は必要である。ネパール入りの行程を入れると、全体の旅程は12日以上の日数が必要になる。他に、聞き取りはしなかったが、食堂で話しをした台湾人の男性は、1年間の休暇を集め、2週間のトレッキングに来ていた。この日数の条件がトレッキング客の大きな増加が見られない理由の一つとして考えられるので、検証の必要がある(図1)。

②トレッキングを含む旅行期間

今回の調査トレッキング中に見かけるトレッカーの中に30代から50代の人は少なく、時間に余裕がある20代の学生、現役から引退した60代以上の人が多かった。特に興味深いのは、仕事を辞めて3ヶ月以上の旅行に出た30代の人を5人以上発見したことである。回答者の中にも3人が仕事を辞め1年間世界一周の旅をしている途中であった。

5) 旅行経歴

大学生1人を除いて、回答者全員が20カ国以上を訪問した旅行歴があった。そのうち2人は、50カ国以上旅行した経験があり、1人は旅行した国を数え切れないと回答した。回答者16人中、8人は今回初めてネパールを訪れていて、以前1回以上訪問した人が8人いた。

6) トレッキング経験

以前トレッキングした経験がなく、今回が初めてのトレッキングである人が3人いた。この3人は、今回のトレッキングの理由として、“一度エベレストを見たかった”と回答していて、トレッキング経験がない人にとっても、エベレストの景色が強いモチベーションであることが分かる。

7) トレッキング同伴者

今回の調査が主に個人客を対象に行ったため、夫婦1組、夫婦と友人2人の4人グループと15人グループのツアーに参加して来た20代の女性以外の9人は、1人でトレッキングをしていた。しかし、1人でトレッキングに来た女性の場合、ポーター1人とガイド1人を雇い、3人で移動していた。エベレスト・トレイルでのトレッキングは、安全のためにガイドやポーターが必要である。このガイドやポーターについて今後の研究課題として検討する。

Ⅳ 今後の研究課題

今回の調査を通して、サガルマータール国立公園にあるエベレスト・トレイルにおけるトレッカー

の実態について一部把握することができた。次は、アンアプルナ自然保全地域におけるトレッキングの実態とトレッカーの特徴について研究を続ける。各トレッキング地域における宿泊施設の運営実態と変遷もヒマラヤ・トレッキングの理解のために調査分析する必要がある。

ネパールを訪れる外国人観光客が増加している中で、トレッキングを目的に訪れるトレッカー数が長年伸び悩んでいる背景についていくつか異なる視点から分析する必要がある。ネパール側の観光客受け入れ環境も実態と変遷について少し研究がされて来たが、トレッキング客側の状況（時間と経費、モチベーションなどの側面）の実態調査が必要である。

謝 辞

本研究はJSPS科研費16H05641の助成を受けたものです。本助成の研究代表者・渡辺悌二教授（北海道大学）、研究協力者・白坂蕃名誉教授（東京学芸大学）とネパール現地コーディネーター・Dr. Dhanajay Regmi (Himalayan Research Expedition) には、調査において多大なる指導と協力をいただきました。また、本研究の現地調査において、立教大学観光学部のゼミ生6人（3年生：齋藤佳織・小林謙太・本橋知明、2年生：江村佳穂・成田明日香・望月みちる）が厳しい行程に参加し、聞き取り調査にも協力しました。この場を借りて感謝したい。

付 記

この小論を村上和夫先生に捧げます。

村上先生に初めてお会いしたのは、観光学研究科として独立する前の応用社会学研究科の修士過程に入学した1997年でした。池袋キャンパス2号館1階にあった研究室は、研究室の先輩になる秋山先生（現玉川大学准教授）と身長の大い3人で入るといっばいになる狭さでしたが、よく3人で研究の内容を始め、様々なことについて話をしたのが、とても楽しい思い出です。最初は村上先生の日本語が難しくても悩んだこともありますが、いろんなことに興味をお持ちで、話好きの先生のおかげで、学者の日本語に慣れることができました。

当時業界雑誌にコンベンションに関する記事を連載しておられ、「企業コンベンション」をテーマに研究した修士論文の手厚い指導をいただきました。博士課程に進学した後にアメリカへ留学を決める際も暖かく応援してくださり、推薦状を始め様々な支援をいただきました。博士課程を卒業するころに、立教大学観光学部の助手の募集に応募することを勧められ、日本に戻るきっかけになりました。その

後、立命館アジア太平洋大学に在職中は、村上先生主催の国際シンポジウムに参加し、海外の研究者と交流する機会もいただきました。2010年に立教大学に教員として赴任することになり、一緒に観光学部で勤務できたことをとても光栄に思っております。本当にありがとうございました。

参考文献

- カルカ・クリシュナ・バハドゥル (2013a)：ネパール観光産業におけるトレッキングの現状と課題。創価大学大学院紀要, 35, 1-13.
- カルカ・クリシュナ・バハドゥル ((2013b)：エベレストを巡るネパール観光の現状と課題。アジア経営研究, 19, 133-142.
- カルカ・クリシュナ・バハドゥル ((2012)：ネパール観光産業の現状と問題点。日本国際観光学会論文集, 19, 13-19.
- 工藤久貢 (2015)：ネパールの山岳観光再考。早稲田大学文学学術院文化人類学年報, 10, 33-41.
- 森本泉 (2012)：ネパールにおけるツーリズム。歴史と地理, 658, 50-59.
- 森本泉 (2009)：ヒマラヤの環境・社会をめぐる変化とツーリズムの展開—ネパール北西部マナンの事例。人文地理学会大会, 146-147.
- 渡辺悌二 (2012)：ネパール・ヒマラヤのトレッキング観光開発と環境へのその影響。立教大学観光学部紀要, 14, 83-98.
- Ministry of Culture, Tourism & Civil Aviation, 2017, 「NEPAL TOURISM STATISTICS 2016」, http://www.tourism.gov.np/downloadfile/Nepal%20Tourism%20statistic_Final-2016_1498990228.pdf

